

組織論へ

藤本 正

※本稿は「龍谷評論」昭和四十三年六月発行・第2号に掲載されたものを転載したものです。(編集部)

「革命は存在しようと欲している。そして存在すること、それは革命にとつては、支配することにほかならないのだ。」

「革命は政府を拒否する。革命の使命は、政府を産業組織の中へ分解することだ。」(ブルードン)

日毎に不断に反戦・反帝・反国家のスローガンは大衆意識に転化し続けている。すでに高度に発展したブルジョア体制はゴールド・ラッシュとドル危機・相次ぐ国内矛盾に大きくあえいでいる。これを書き進めている時、ジョンソ

ン演説が伝えられており、北爆の一時的停止と大統領選辞退のニュースが流れている。党利を優先させた決定であるにせよ、これは直接にベトナム人民と国際プロレタリアートの連帯行動による一定の勝利である。帝国主義体制の全般的危機は、一步から一步へと激化を辿り、情勢は日毎に流動化のピッチを早めるであろう。私的資本と体制による侵略政策は、その墓穴を完全に掘り終えている。問題はずでに掘りおえてしまったにもかかわらず、資本法則に屈服する体制と常識が、社会主義圏の多数をも併せて持続していることにある。支配暴力装置たる国家権力は、社会の上

の現状と擬制とに対して、広範囲な大衆は、生活そのものと

と直接生産力たる存在性から、社会の内に生れ、内に育つ、社会そのものとしての人民的、民主的な各種の組織体と結社形式の重要性を自らの武器として対置してきている。社会原理と自由原理に目覚め、自治分権の共同性と相互扶助の自主的、創造的な思考様式は、大衆の日常的な知恵に転化し続けている。

私達は支配者側の国家原理の優位の宣伝に対決して、社会原理の優位の主張を一層系統的に広範に行なわねばならない。

ところで、国家の妥当性と権威性の源泉は、万民の法による統治を目指す最高の会議形態たる国会に他ならない。そしてその国会は詐欺漢の巢窟であり、疑獄と汚職が渦巻く頭の黒い鼠共の根城であることが千万遍も繰返し暴露されている。その中央集権的民主制なるものの、単純極まる多数決原理とは、本来的に民主主義の限界であり資本と官僚主義の恣意の下に牛耳られる道具に過ぎない。全き豚小屋であり、ソレルが端的に指摘したように「議会体制は、株主総会と同じようにごまかされているのであり、むしろ先行形態たる株主総会を引写すことで成立」しているので

ある。

そして、この限りにおいて同一の形式主義と多数決信仰に立つ輝やける代理人の集会を最高の、二重の、権威基準とするソビエト体制側も例外ではない。ばかりか共犯の關係と見做されねばならない。

(レーニンの対国家観のチグザグと組織論の関係)
(どのような組織も組織一般の範囲内だ)

「『もはや本来の国家でない』国家、それは、人民から離れた軍隊と警察を人民自身の直接の武装に代える。パリ・コミューン型の国家である」と私達アナキストと同一な解釈をとり、「あらゆる革命のもつとも重要な問題は疑いもなく国家の問題である」として、名著「国家と革命」をかいたレーニンは、実際には如何にその国家観を動揺させていたかは、「何をなすべきか」から、ポ党結成の直接な事実分折たる組織論「一步前進(党内の危機)」を経て、一七年革命期の諸著作および権力奪取後の「左翼小児病」に至るまでを併せ読めばほぼ明らかとなる。

レーニンの国家論は、エンゲルスの諸規定を天才的にロシア的な後進的な現実に適応させながら、差迫つての万止ぬを得ない特殊的な方法論となしえたものであった。だが

当然ながら、そこには党組織の中央集権的民主制なる上から下への統制論が、ほぼそのままに反映されている。彼の党組織論と彼の国家論とは対応する関係にある。

ではそれはどのように展開されたか。国家権力Ⅱ官僚制と軍隊・警察Ⅱ監獄等を意のままにする武装した人間の特殊な部隊というエンゲルスの規定を辿りながら、同じエンゲルスの「人に対する統治に変わって、物の管理と生産過程の指導とが現われる。国家は『廃止されるのではない。それは死滅するのである。』」という、反デュ論中の言葉を引用して、廃絶されるブルジョア国家と消滅するプロレタリア独裁国家の有名な定式を完成した。

しかし、これはあくまで一般規定たりえず、特殊の歴史的な当時のロシア現実と、ヨーロッパ革命の混迷と敗北にいたる困難な諸条件下でのみ許容される重要な天才的な修正論であった。革命理論とは、原理原則を「テコとして」具体的な現実を具体的に把握する」ことで、当面の日程化とする作業である。レーニンはそこでロシア革命の成果防衛を最優先させざるをえず、またそうした。ために弁証法の重要な方法のひとつである、同時思考のロジックから導かれた命題、「国家の廃絶Ⅱ消滅」の、誰よりも、パリ・コ

ンミュンから生まれて、一九世紀の人民的思考が、高価な代償を払って継承し確立した原理を論理プロセスとして機械的に形式化したものである。

彼が次の様にいうときにマルクスの論理、すなわち「プロレタリアートに必要なのは、直ちに死滅し始めるし、また死滅せざるをえないように構成された国家だけ」という制限は大きく後退せざるをえない。そして官僚主義、すなわち三年の時期に彼がその論難者達を嘲笑ったかの官僚主義が、急速に巨大化し桎梏と化したのである。この事に関するレーニンの危惧感については「左翼小児病」がひとつの証言である。また、ボ党十回大会での中央委の政治活動報告「演説」：「官僚主義との斗争が絶対に必要な斗争であること。……わが国家機構における官僚主義はひどいものになったので、わが党綱領もそれにふれているほどである。そして、それは官僚主義が、小ブル的自然成長性およびその分散性と結びついているからである」との言葉にも明確である。それから「国家」は、スターリン時代をへてブルシチョフの時代に「全人民国家」へと昇格して、昨六七年には遂に五〇周年を盛大に祝ったのである。

レーニンはいう、「エンゲルスによればブルジョア国家

は『死滅』するのではなく、革命の間にプロレタリアートによって『廃絶』される。この革命のあとで死滅するのは、プロレタリア国家または半国家である」^③

今日、この言葉は空しい、半国家すらなお非現実なのである。そして彼はさらにいう。「プロレタリア国家のブルジョア国家との交代は、暴力革命なしに不可能である。プロレタリア国家の廃絶、すなわちあらゆる国家の廃絶は『死滅』の道による以外には不可能である」と。ここには僅かながら、廃絶Ⅱ死滅の同時思考の痕跡がある。

これに対して、私達は、反国家反政府の原理を一貫して降すことなく、国家は明確に直ちに速やかに廃絶Ⅱ死滅の論理によって打倒されねばならぬと主張する。私達は、生産手段の国有化は、決して社会による共有化ではないことを見忘れない。この明確な区別をなし崩すことは重大な革命的裏切り行為となり終ることを指摘する。

すなわち、国有化とはボ党の組織論が持つ論理必然性と併せて「党存在」そのものの無謬性神話を辿る「権力存在体Ⅱ書記局」の性格によって、人間的な弱点がある聖化作業による悪しき意味でのフィクションによって、それは益々社会に対して外的となる。上方から支配権力をふるう自

己疎外体として一層特異化したもの、にすぎない。断じてそれ以上でもそれ以外でもないことを私は強く主張したい。それは、中国共産党がその嵐のような文化大革命のなかで、一つの明確な概念となしえたように、「官僚資本」に容易に変質転化するものであり、資本法則に基づき労働支配にすぎないものであることを指弾するものである。

この論理は、今日の巨大なテクノクラシーに依存した高度生産の社会において、不断に日毎に真理であり、かつビュロクラシズムに分業化の永続的固定化をはかるエリート志向の時代に当面しての唯一の有効な斗争理論となろう。かつてフルシチョフが、労働者共産党と農民共産党に党を二分する思いつきめいた提案を行なったが、それは伊達や粹狂からではないのであって、行詰った官僚統制のシステムと、それを克服しきれない文化的立遅れの現状に対して、苦しまぎれに打った彼一流の工作である。

レーニン時代すでに「ひどいもので、わが党綱領もそれにふれているほど」であった、「国家機構における官僚主義」とは、ほかでもなく国家機構の最重要部門を全面的に占拠していた、「党官僚主義」でなくて何であろう。そして重要なのは、すでにレーニン時代においてしかりであつ

たこと、これである。

レーニンによるボ党の組織論は、十九世紀型の低次な生産力社会と封建主義がまだ世界にみちみちており、革命ロシアにおいてもその残粕が濃厚に意識を制約していた、特異な条件にあっては正しい。しかし今日の高度に発展した大量生産と、教育が普遍化し知識が大巾に大衆化して、先進的な労働者のインテリジェント化が、自発的な思考操作が可能視されてよい現代にあっては、全くの保守反動的な作用をもたらすということである。

レーニンの組織論の形成において、決定的に重要なのは、一九〇三年のロシア社民党二回大会であり、その記録分析である労作「一步前進（党内の危機）」である。

それは、「革命党に関するマルクス主義学説をさらに発展させ、その組織原則をねりあげた。またマルクス主義の歴史上はじめて、組織上の日和見主義を余すところなく批判した。……組織の重要性の軽視が労働運動にとって危険なことを示した」と評される。

しかし「組織の重要性」の中心思想とは一枚岩の党概念はナンセンスとしてもなお「鉄の規律」「軍隊的な統制」が重視されるところにはない。「党組織の重要性」とは、

思想原理の実現のための道具としての重要さであるかぎり、

それはかかる思想の原則と思想形成のための人間実存性の問題と深くかかわるものである。外部から注入される、いかなる「輝やける完成された思想」（リープクネヒト）といえども一方での断続的な思想形成の作業と切放せない筈だ。そして私は「完成された思想」観念にきびしく対立するものである。しかるにレーニン組織論は文化的側面を欠落して政治主義的のみ理論化された欠陥があるものと考えられる。

わが国でも、いわゆるアナ・ボル論争として争われることになる中心的な原理上の問題は、党概念と組織概念の区別のうえにたつて次の通りである。

①前衛性と大衆性。②自然発生性と目的意識性。③自治主義対中央集権制。④民主主義的形式の原則対官僚主義的形式の原則。⑤上から下への組織対下から上への組織。

反対派の論拠に対するレーニンの論拠は有効性をおびて展開される。にもかかわらず論争上の問題点は「国家と革命」の書かれざる第七章と共に殆んど未解決のままであり現在に至る。

見落してならないのは、真正の反対派でありうるのは、

アナキストのみであり、そのアナキストは大会構成にまったく関わっていないということである。この論争相手はマルトフを首領とするメンシエビキ其他の日和見である。だから論争は各原理上の問題点を掘り進める形ではなされていない。

大会での意見の相違はレーニンもいうように「主として綱領問題や戦術上の問題でなく、単に組織上の問題に帰着するのである。さらにそれは、前年のブンド派が有勢であったベロストツクでの「第二回大会招集のための組織委員会」メンバー二名を含む代議員の大多数が逮捕されたことから、プスコフ協議会での代議員の大巾入替えという行さつがあつて、主導権争いを巡る泥任合を中心とした。

原理上の争いでないからこそ、問題毎に賛否両派は激しく、だが一定の色彩を持って入替るのであり、主として五大原理の問題は互いの多数派工作への取引材料にすぎなかつたのである。

次にレーニンの基本的な思想に関する理論の構造を問題別にたどらう。「組織」という語の「狭い意味と広い意味」に立って辿らう。⑧

（前衛性と大衆性。自然発生性と意識性）

これは有名な「規約第一条」問題とも関わるが更に永い理論過程に相渡る。

まずレーニンは、前衛と大衆、非党員と党員の問題を次の様に突く。「資本主義の下では、果てしない細分、抑圧、愚鈍化が、『訓練を受けていない』不熟練労働者の極めて広範な層の上に、不可避免的のしかかっているにもかかわらず、どのストライキ参加者も社会民主主義者になり、社会民主黨員になることが出来ると、自分を信じ他人にも信じさせようなどと思いつくなら、マルトフ流の夢想で自分をなぐさめることになる。⑤」と。だがこの引用文中でも社会民主主義者と党員の区別がはずされている。

そしてこれをいうに先だつて、「党は組織の総和」（算術的な総和でなく複合体）と妥当に規定しながら、一方「日和見主義と無政府主義か、それとも官僚主義と形式主義か」という問題の立て方をする。これは日和見主義については正しいが無政府主義については大会構成事情から見ては正しくないが、またさらに「問題は組織の原則を一貫して貫くか、それとも、混乱と無政府状態を祭りあげるか」という一見気付きにくい論理暴力を使っている。問題はこう

だ。一貫して組織原則を貫く」とは何なのか。そうしていわゆるゆるやかな組織（連合主義）が、なぜ直ちに「混乱」となるのか。第三にアナキなる語の未分明性がある。原語のアナキの意味が意図的に無力化されていることと同時に、どういう意味で「無政府」が状態にくつつくのか。状態とは状況論的な概念であり、無政府とは社会原理の概念であり様式概念である。もともと「無政府状態」なる語はアナキストも多く使用はしているが、それを混乱と直結することは悪しき作意である。このような思考法は彼の「労働組合組織観」にも対応する。それは「より初歩的な、未発達な層の意識により受け入れ易い組織」の言葉である。そしてレーニンの価値観が次の様に形成される。「名譽あり責任ある名称を名乗る権利ある者と混沌の分子」とに。名乗るとは、自から名乗るとの論理構造にあるもので、名乗らされるべきではない。だが事實は「党によって名乗らされる」であり、また自ら名乗るにせよ、このような名乗る権利は無い方がまだだ。プロレタリアの意味での名譽とは（名譽などもともと副次的問題だが）組織加盟の有無に関わらず、プロレタリア的役割と犠牲の行為に附されるものだ。

または彼の組織論は「運動の根についての哲学的、社会的問題と、技術的、組織的問題とを混合したナデジダンの誤り」という論理にもポイントがある。すなわち彼は組織論を技術論でとらえている。だが哲学的、社会史的問題と技術的組織的問題とがどうして切放されるのか。特にそれが社会主義的な組織論である時に。

技術論的（機能論的）のみ構成された時に、組織論がスターリニズムに至る道はシリウスに開かれるのであり、各級機関の重要度についても、「政治局が書記局の上位にならねばならない（二五年の第二段階）」とか、「書記局の技術機関化、政治局の絶対権の要求」とか、「政治局の廃止と書記局の政治局化（二三年の第一段階）」のための綱領提案が真剣になされねばならぬ羽目に至る、非痛なボ党一四回大会の状況。すなわち技術的な組織系統論上からは問題にならないけれども、実際上の機関に対する価値判断の誤認も生れるのである。

第一書記が実質上の党と一国の独裁者となりうる、ボ党の組織論とは、本質的に技術論であるが故に、資本労働の下に屈服する思想の源泉ともなる。すなわち組織とはそこで資金量の問題でもあるから、（例えばブルジョアイデオ

ロギーは崩壊しても、資本の掌握と操作によって国家体制が維持される）官僚的地位と秘密保持権とは相互補填して、機密費の大金出費を主流派に独占させる。ここでは資金と理論の関係が前者の優越をもたらし、理論斗争は無意味化する通路がある。

だからこそ、私共は文化革命を重視し、かかる鉄の規律組織の機械的システムと斗争する。党存在はあくまで道具であり、思想を実現しうる可能体であるにもかかわらず、俗流主義者はかかる仮説の要素を見忘れて、単に卑俗に体现体そのものと誤認する。ここからはかの中世的信仰への転落は一筋道である。

レーニン主義組織論の偏向にある根は深い。それはマルクスの量、質概念、殊にエンゲルスの自然弁証法での量、質概念のあやまちと、それをシリウスに社会理論に移行敷衍した誤りが決定的なものとしてある。

エンゲルスは単に量であるものをしばしば質的变化だと錯覚しているし、また社会的概念化した時、「量」に対する「質」の優越性を無自覚的にニュアンスとして持ちこんだ。これは当時の素朴な科学万能主義および進歩思想概念の無意識的な附着である。

そしてレーニンの前衛概念には、この色彩がより無自覚に強められており、すなわち量としての大衆認識と質としての前衛意識に表現されるのだ。先にもふれた「名譽あり責任ある者と混沌の分子」との粗雑な非科学的な分類はこれらの反対のひとつである。

人間を物理的にのみとらえ単なる量に還元しようとする人間存在性に対する軽視、実存性に対する無理解は、「受動的な無自覚性」労働者。主体的な意識性「社会主義評論家」へのロジックにまで行きつく。

「民主主義対官僚主義、これ即ち自治主義対中央集権主義であり、社会民主党の日和見主義者の組織原則である。前者は下から上へ進もうと努め、従ってどこまでもできる限り自治主義、民主主義を固執し、これは無政府主義にゆきつく。後者は上から出発しようとする、部分に対する中央部の権利と権限とを広げること固執する」とレーニンがいうとき、それは残念ながら見事な見当違いである。すなわち第一に無政府主義者は断じて民主主義者ではないし、窮極原理を手放さず議会主義を否認するものであるから、それはボ党的な民主主義否認の原理に対する正系であるのだ。

第二に私共のいう自治主義とは、あくまで自由、社会、直接行動の思想にもとづく自治主義である。そしてボ党官僚は触れられないが、いかなる時期のいかなる革命においても、「自由」のスローガンが掲げられない革命はなかったし、今後もないであろう。

第三に運動論としていえば、アナキズムが意味する運動論とは、否定の否定たる強靱な政治意識である。即ち政治の特異分業制を乗り越えていく、すぐれて政治否定の政治としての運動認識である。若しこのことを意識せぬ者があるとすれば、そのものはアナキストではないのだ。

したがってかかるレーニンの論理は無政府主義に対する誤認であり、無政府主義には立至れないものである。

さらにK・カウツキーの民主主義規定の引用箇所、すなわち「大衆の委任代表に対するこの大衆の支配^⑩」ということも、形式理論上の正しさにすぎないことは、「会議」が理論的な正当性を反映しえない機関形式にすぎないことから明かである。それは精々理論的な正当性を反映し得ることもあるに過ぎない。

私は労働者であって同時にインテリであるが故に時間もなく、資力もない。(レーニンがカウツキーの文章を引用

⑩ いうように。)そして同時に体力もない。だから先を急ごう。

レーニンの組織論には権力掌握前とそれ以後との党性格の変貌に関する考慮が全く欠けている。のみならず、スターリン的な単なる肯定性の論脈の下に、レーニンの緊張した否定の否定の論脈が単純化された時、それは大衆蔑視の思想にまで転落するのだ。

そこではつぎのようなブルードンの結社原理に関する否定性のバネは片鱗もなく見失なわれる。「結社が普遍的制度として、革命の原理、手段および目的として提示されるときには、それは搾取と専制の下心を隠しているように私には思われる。私はそこに一七九一年に再建され九三年に強化され、一八〇四年に完成され、一八一四年から三〇年までに教義および体系として確立され、さらに最近では直接政府の名のもとに再現された、統治的体制のインスピレーションを見る。」

「結社は、その原理のゆえに存在するのではなく、その諸手段、外的な原因に依存するのである。」^⑪すなわちブルードンは言及しないが、結社は一つの原理たりえないという思想が見失なわれている。

レーニン組織論はその唯一性の論理必然性にもなつて、こうして遂に党の上に党を築くに至つたということ。即ち世界党たるコミンテルンの下に各国の党を従属させ、その規約の絶対的承認と命令を至上の権威とするに至る。強権的な国家原理に組した思想がどこまで虚像を拡大するものは、長期な人間史が、地域を問わず私共証明してきた。むしろレーニンはさらに屋上屋を重ねる作業を営むべきだった。そのとき最高度に擬判を導いたたせた強権体制は、一挙に崩壊しえたであろうに。

コミンテルンが、階級的な軍隊編制に仕立てあげた鉄の規律の各国支部共産党を全世界党として事実上支配したこと。逆に各国の党官僚は、自民族大衆の苦悩に直接かかわることを避け、国際プロレタリアートの輝やけるスローガン「プロレタリアートに祖国なし」を「プロレタリアートの祖国同盟」に無条件的にすりかえた。その信仰的な権威依存に屈服した弱者の論理からは、非共産主義的な非マルクス主義的な形而上学が発生する。すなわち具体的現実を具体的に把握する思想原理は消滅する。

この事情を市川正一の公判陳述は次のように述べている。「二年七月に組織され、同年十一月のコミンテルン四回

世界大会に代表が出席して党の成立を報告し、はじめて正式にコミンテルン日本支部日本共産党として認められた。」
「日本共産党とコミンテルンとの組織的な関係についてはコミンテルン規約につきのごとく規定している。……コミンテルンは真実に全世界の統一共産党でなければならぬ。あらゆる国々で活動している諸共産党は単にコミンテルンの個々の支部にほかならぬ。」
「この集中的な統一的世界党としての国際共産党の不可分な構成要素として日本共産党は組織され、コミンテルンに加盟した。これがコミンテルンと日本共産党との組織関係の根幹である。……コミンテルン二十一ヶ条の加盟条件は特にレーニンが直接起草した厳格なものであり、プロレタリアートにとって歴史的なものである。」(日共党斗争小史六五頁)
唯一性の教会国家原理に基づくレーニン組織論の行きつく先はここにあった。

この「組織された不信」という半面の正しさを本質とした、レーニン組織思想の前提には、組織論を確定的な理論となしうるとの誤認があつた。と同時に、もう一つの誤認がある。

それは、レーニン、カウツキー、プレハーノフ、スターリン等々に系統的に受授され拡大される、理論形式に対し、労働者階級は無能力だとの思想である。そしてこの観点が「自然発生性と意識性」の原理問題に深くかかわっているものと考えられる。

単なる自然発生的な無自覚性は不断に意識性へと転化されねばならぬことは云うまでもない。

しかし私はアナルコ・マンミュニストとして、労働者階級がその階級認識を理論へと自己形成しうる能力を本来的に存在論的に有するものと考ええる。むしろその能力こそが、下からの革命の原動力だと考える。

では、ボ党やメンシェビキの、レーニン、スターリン時代から今日までに及ぶ、マル・レン主義者の先進的理論家としての立場からする労働者階級観のこの点についてみよう。このいわゆる外部注入論の観点は、先にもかかれた「輝やける完成理論」への拝跪と深くかかわるものである。一段から一段へと長期にわたって反復された斗争過程の中からの、発生的な社会主義的認識の形成過程を、段階的にとびこえて、輸入理論として完結的に持ちこんだ当時のロシアという後進性がそこにある。

カウツキーは、次の様にオーストリアの綱領委員会の案文を非難した。「『プロレタリアートはますます資本主義に対する斗争をとりあげて余儀なくされ、ますますそうする能力を得る。』プロレタリアートは、社会主義の可能性と必然性を『意識するにいたる』」

こういう文脈におかれると、社会主義的意識はプロレタリアの段階斗争の必然の、直接の結果であるかのように見える。だがこれはまちがいである。……近代の社会主義的意識はただ深遠な科学的洞察を基礎としてはじめて成立しうるものである。……ところが科学の担い手はプロレタリアートではなく、ブルジョア・インテリゲンツィアである。近代社会主義もまたやはりこの層の個々の成員の頭脳に生まれ、彼らによってまず始めに知能のすぐれたプロレタリアたちに伝えられた……だから社会主義的意識は、プロレタリアートの階級斗争のなかに外部からもちこまれたあるものであって、この階級斗争のなから自然発生的にうまれてきたものではない」と。レーニンは「何をすべきか」にこれを転載した。またスターリンは次のエルフルト綱領中のカウツキーの言葉を引用しつぎのようにいう。

「もし社会主義意識が科学的基盤のうえにつくりあげられたものとすれば、またこの意識が社会民主主義の努力によって外部から労働運動の中にもちこまれるものとすれば——そうしたことが行なわれるのは、労働者階級が労働者階級に止まる限りは、科学の先頭に立ち、自力で科学的社会主義をつくりあげることができないからであるのは明らかである。というのは、彼らにはそれだけの時間も資力もないからである。」¹⁴

引用されたカウツキーの言葉は次の通りだ。

「プロレタリアは——プロレタリアに止まる限りは——ブルジョア思想家が達した限界をこえて独自に科学をおしすすめる余暇も資力ももたない。だから、元来の労働者社会主義は、空想主義のいっさいの本質的な標識をおびざるをえなかったのである。」そしてカウツキーはこのことと無政府主義を結びつける。無媒介に直接に結びつける。それはボルシェヴィストに共通する単純な手口だからそうする。哲学的に深めることをしないで慣習的にそうする。

またつぎにあげるのはヴェラ・ザスーリツチの言葉である。「プロレタリアート全体の階級的連帯性という思想でさえ……どの労働者の頭脳にでも独自に生れてくるほどに

単純ではない。……社会主義は……労働者の頭脳のなかに『ひとりだに』……成長してくるものでは決してない。……社会主義の理論は、生活と知識との発展の全体によって準備されたものであり……このような知識を備えた天才的な知能の持主によってつくりだされた。」この思想普及の基礎をおいたのは「上流階級の学校で教育をうけた社会主義者であった。」¹⁵

つぎがプレハーノフだ。

「……『バルチス』をとりのぞけば、あとにはただ無自覚な大衆、外部から意識を持ち込んでやらねばならない大衆が残るだけである。」

(二回党大会)

レーニンも強調する、社会主義をつくりあげるのは有産階級の教育ある代表者であるインテリであって、労働者たちは無能力だとする考えは、だが不思議に西欧には見当たらないということになる。

そこには当時の発達した西欧文化の水準と、後進的な本来の社会組織の未発達なロシアでの文化水準という、大きな埋めがたい格差が横たわる。

そこには広範な人民の生活意識に刻みこまれた、遺産と

しての社会主義理論の発生経路を、歴史と文化意識とに組み込めた民族と、そうでない民族との先進と後進との明確な差異がある。

また生存費+繁殖費という直裁な十九世紀的な賃金体系と、生存費+繁殖費+文化費という水増しされた、現代資本労働の賃金性格のもとでの意識形成に関する問題もある。そしてこのことは、当時のロシアでの「経済主義」の概念把握が、当時のフランスでの「経済主義」運動とは、本来的にまったく性格を異にしたものとして立現われたし、また現われねばならなかった限界を説明する。

本来の経済主義、すなわちアナルコ・サンジカリズムとは、運動の政党主義への偏向に対する対語であつて、それは人民の直接的な政治参加をスローガンとした自治生産管理の思想である。これを狭い意味での政治（議会政治・政党政治）に係わらない、経済ストライキの意味に解釈したものが、当時のロシアでの経済主義の運動と観念との一切であつた。

永年に亘る民主主義的な運動の成果として、漸次的に達成されてきた西欧的国民議会様式は、いわゆるお上意識を社会から大巾に駆逐していたが、半面で政党政治の腐敗は、

例えば今日の日本の実状にあつた。

これに反してロシアでのそれは、ツァーリーの絶対体制の下での帝国議会が今まさに生まれでたばかりであつた。

経済主義は経済ストライキの意味に受取られ、「エコノミスト」が頭角をあらわす。それは政治意識にも政党政治意識にすらならなかつた。そこでは政治は特殊の少数エリートがたずさわるもので、人民はそのことに無縁だとする、あの封建的な政治への物神崇拜意識が濃厚だつた。レーニンの「社会民主主義評論家」としての自己規定もこれらのことと、民族社会の条件を結付けて理解されるものである。私共は自然発生性へのいかなる拝跪論者でもない。問題は次元が違ふのだ。社会主義者の全ては、無意識的な過程の意識的表現者でなければ存立理由がない。

私共のいう自然発生とは、マル・レン主義理論の理解者が、必ずしも革命運動や社会活動に従事せぬという事実ばかりか、マルクス理論を理論として習得することに誰よりも綿密に時間をかけた、学者や多数の学生、官僚層が、日和見や数条主義者に、また俗流的に卑俗化して、反動体制の強化や生産力理論家として意識的に立現われることを、説明できない点を真明しようとする点にある。自然発生性

の深い考察なしには、意識から行動への人間転化力や、革命的な自発性や創意性を思想の問題に組込めないからである。それは歴史法哲学に対する時間概念の問題として、自然法哲学の思想をかかわらせることにもあろう。また政治

的国家と政治的組織とに革命勢力を分業的に収斂するアプローチとは反対に、反政治的な反政党的な、反政治的政治として、すなわち直接行動論にそれはかわるものである。要するに革命とはあくまで社会的組織の消長関係にある。

その拡大強化こそが革命である。社会存在からの疎外体として社会に対して権力を振る装置は、一切が国家装置である。それを打倒することが革命でなくて何であろう。

そして前衛性とは、生殺与奪の権を握ることで人が人を、集団が大衆を抑圧し屈服させる思想と組織にはない。革命家だけの組織は今日、相対的に役割が低下した。『多元の党派性』というポリセントリズムの思想の本質は一貫して私共のものである。それは理論概念に官僚的統制を加えない生々した組織として、革命家と革命的大衆が入り混つた運動体を形成するものだ。その時、バクーニンが生涯を賭して固守した臨時の「革命委員会」の党派概念が、単に政治的組織に止まらず、政治的芸術的な、戦略の芸術化をも

打立てえる柔軟な組織論と組織体としてよみがえるものである。

ここでは、適確な目標設定が重要な作業となり、大衆を受動的、物理的な対象としてとらえる側面が排除される。そこでは大衆を主体的な創造者として、その能力を形成的に全面的に開花していくアプローチが発揮される。それは人間存在の自由と自発への志向を、プロレタリア存在に転化した組織論となろう。

革命的組織は、すぐれて社会組織として多様な多元の存在であらねばならない。

ソビエト同盟から各国の共産党に移殖された、唯一性のシステムは徹底的に打破されねばならない。

『反逆することは道理である』という根本思想が貫徹する時に、はじめに『労働者の解放は労働者自からの手で』というスローガンが回復される。労働者階級には祖国はなく、特異人間はないのだ。

こうしてこそ、七〇年安保体制への反対斗争は真にレボリューショナルなものとなろう。

私達にかかる組織原理にもとづく、運動体によって、帝国主義資本と官僚資本との秘密を全面的に、徹底的に暴露

する。ここにこそ一切の人民自治の鍵がある。ここにこそ人民を略奪し蔑視と抑圧を系統化している支配グループの最大の急所がある。

万国のプロレタリア団結せよ。
多様に多元に創造性にみちて団結せよ。

① 暴力論(下)

一三一頁

この章の四の箇所は次の通りだ。「選挙的民主主義は、取引所の世界によく似ている。：彼らは近代産業の諸驚異に眩惑されている。：議会体制は、株主総会と全じようにごまかされている。：民主政治は、不謹慎な資産家たちの夢想する宝の国なのだ。」

注(暴力論は岩波文庫 他は国民文庫他)

- ② わが国の革命におけるプロレタリアートの任務三一頁
- ③ 国家と革命 二九頁
- ④ 全 書 三四頁
- ⑤ 一步前進 頁
- ⑥ 全 書 八六頁
- ⑦ 全 書 七九頁
- ⑧ 何をなすべきか 九一頁

⑨ 一步前進

二六八頁

⑩ 全 書

二七五頁

⑪ 何をなすべきか

頁

⑫ 一九世紀革命の一般理念

一一三頁

⑬ 全 書

一三一頁

⑭ 党内の意見の相違についての小論

七九頁

⑮ 「ザーリア」。スターリンの引用箇所

(党内の意見の相違についての小論)

⑯ 徳田球一が黨員についていった言葉

無政府主義論

序

ありとあらゆる思想が現実世界の〈場〉から離陸して延命の〈場〉へと飛翔した時、その延命の〈場〉は必然的過程として神秘的に凝固し、その神聖化された〈場〉はあくまでも空間的に獲得された〈場〉でしかないが故に、その〈場〉を無限大に觀念に仮構することによって延命している思想は、しよせん現実の時間軸を持つことなどゆるさるてはいない。ここに現代のアナキズムが思想に向けてではなく、文学や美学に向けて上昇し、あるいは現実的事実としては否定されてしまった過去のアナキズムの論理を呪文のように唱えてしまうという思想的奈落へと落下せざるを

志摩 弘

得ない。

そして今でもわたしたちはあまりにもアナキズムと云えばブルードンやクロポトキン、バクーニン等しか想起できない思考に汚染されきっている現状である時、アナキズムとは何かという自問はある一定の有効性を持っている。ブルードンやクロポトキン、バクーニン等が思想的には完全に異質であるのにもかかわらず、彼らを一括して包み込むところのアナキズムという概念の内実とは何であるのか。考え方によればブルードンとバクーニンの思想的異質よりも、はるかにバクーニンとマルクスは思想的類似性を持っており——バクーニンはマルクスの党独裁に類似する概念としてきわめて抽象的ではあるが秘密独裁を過渡的世界における権力形態として位置づけている——^注—そういう意味に